

発達に違いのある子どもたち 生まれつきの「違い」が もたらすこと(中編)

7月23日から開催されたオリンピック、パラリンピックのさまざまな競技の選手達が、テレビの中で熱戦に挑む姿に目を奪われ、つい立ち止まり応援してしまったり、という人も沢山いたのではないのでしょうか。出かけることもままならなかった夏休みの子ども達にとっても、コロナ禍の淀んだ空気を払拭してくれたただけではなく、選手に自分を重ね、将来の夢を描ききっかけともなったことでしょうか。

パラリンピックでは、選手がメダルを獲得するに至るまでのさまざまなエピソードが紹介されてきましたが、中には思わずことばを失うような事故や病気に見舞われ、そこから競技に向かえるようになるまでの道のりは過酷で、経験をした人でなければわかり得ないことではあります。多くの選手は、周囲の人の励ましや応援がエネルギーとなったことを語っていたのがとても印象的でした。

リハビリテーションと ハビリテーション

パラリンピックの選手の中にも、その障がいが生まれつきである人、後天的なものである人、それぞれいらっしやうと思います。主には医療機関で障

がいに対して行われる機能訓練等を、世の中では「リハビリ」と呼ぶことがほとんどだと思えます。リハビリテーション(通称リハビリ)の語源は「再(再び) + Habilitate(適した)すなわち「再び適した状態になること」であり、生まれつき障がいのある子ども達には当てはまりません。

子ども達に最もふさわしいことばは「リ」を省いた「ハビリテーション」であり、「生まれつきの障がいや幼少時から障がいを対象とした医療と保育」、「つまり「療育」を意味します。それは決して「訓練して皆と同じようにする」ということではなく、「個々が持つ能力を最大限に引き出し生かせるようになる」という意味であり、「療育者」はそれを導く職業と言えます。

ただ現状としては、療育の現場に携わる人がどれだけ理解しているのか、安易に「療育」ということばが使われつつある。昨今、「療育」の意味すら変わったのではないかと思うことも少なくありません。

生まれつき「違い」と「普通」と

標準的な発達を遂げる子ども達も、周囲の大人があまり意識しなくても、

いつの間にかやれるようになっていた、ということがほとんどだと思います。しかし、生まれつき、または早い時期から発達障がいがある子ども達は、いわゆる「標準的な発達」に近づくことはあっても、同じ経験をすることはありません。

「普通」ということばが、その「標準」を意味するのであれば、発達障がいのある子ども達に「普通」を求めることは、その子をいかに困惑させることであるか、関わる周囲の大人はよく知っておく必要があります。

例えば「正しい姿勢」を集団の中で求めることは日常的だとは思いますが、「正しい姿勢」とは具体的にはどのようなことなのか、事細かに答えられる人は少ないようです。背筋を伸ばす、まつすぐ前を向いて、と表現しても、発達障がいの子どもの感覚や運動に困難を持つことが多いので、自分なりに「正しい姿勢」をしていたつもりでも、ちゃんとしなさい!と言われた経験もあるのではないのでしょうか。

ここで周囲の大人が知っておくべきことは、彼らが幼少時や低学年くらいまでは、自分と周囲の子ども達の間に何らかの違和感を感じることはあっても、大体はみんな自分と同じ状況だと思っている、ということ。だからなぜ、同じようにしているつもりなのに自分だけが叱られるのか理解することが難しいので、そのような状況が繰り返されると、自分に自信が持てない「自己否定」の状況に陥っていくことになります。

発達障がいの子どもの達に関わる周囲の大人は、その子が「普通」を体感することが困難であることと同じように、自分たちもその子と同じ見え方、聞こえ方、体の感覚の受け取り方、周囲の出来事を感じ方を、経験することができないという事を知っておかなければなりません。そのことを理解していれば必然的に、互いに知り得ないのだから、互いに尊重し合わなければならぬ、という感覚が生まれてくると思います。

見た目に「違い」がわかりにくい発達障がいの子どもの達、さまざまな苦しさがあっても、違いを超えて、共に生きたいというエネルギーはぐくむことが、療育の最大限の目標と言えます。そのために療育者である私たちは、子ども達が抱える困難さを代弁し、努力していることを一人でも多くの人に伝え、子ども達が生きづらさを感じずに生活することができる地域社会を目指し、発信していかねばならないと思っています。

文書寄贈 NPO法人こころコミュニケーション

の発達支援

